

愛はすべての罪を覆う

箴言 10:12

主題：愛はすべての罪を覆う

- (1) 箴言が描く罪とは、
- (2) 愛が覆うとは、

導入

愛はすべての罪を覆う、が今朝のメッセージです。箴言が描いている罪とは、いかなるものでしょうか？そして、愛がすべての罪を覆うとは、どのようなことを言うのでしょうか？

- (1) 箴言が描く罪とは、

「主に逆らう者は自分の悪の罠にかかり 自分の罪の綱が彼を捕える。諭しを受け入れることもなく 重なる愚行に狂ったまま、死ぬであろう。」と箴言5:22、23にあります。不倫について箴言は、5章と6章でこのように表現しています。不倫は、寿命を縮め、富・財産を失い、後悔に至る。自分から災いを招き入れ、滅ぼされ、その恥を消し去ることはできないばかりか、償う方法もない。自分で自分の首を絞め、懲らしめられてもそれを受け入れて悔い改めることをせず、過ちを犯したまま死に至る。行き着くところは、死であり、よみである。と。

さらに、「主の憎まれるものが六つある。心からいとわれるものが七つある。」と6章16節で言われているのは、高ぶる目、偽りの舌、罪の無い人の血を流す手、邪悪な計りごとをたくらむ心、悪に向かって早く走る足、うそを言いふらす偽りの証人、いつも争いを起こす者。目も口も手も心も足も人格も言動も、高ぶりと偽りと流血と悪巧みと軽はずみと悪習慣と秩序を乱す力の虜になってベクトルを誤り、主の憎む方向へと向かってしまいます。それは地獄へと続く道です。箴言に9回出てくる地獄は、ヒノムの谷から来ていて、町の汚物や動物の死骸が捨てられ、罪人の死体が焼かれ、永遠の滅びの場所であるゲヘナを指すものと、すべての死者が集められるシェオール/ハデスを指すものがあって、主は後者からよみがえられました。

そもそも人の罪は、どこから来たかという、エデンの園で人は、神が命じられたことよりへびの言うことを優先しました。神がだめだと言われたことをしてしまいました。神のことばを軽んじてしまいました。その結果、恥ずかしさを知り、恐ろしくなって隠れることを知り、言い訳をすることを覚え、呪いと敵意と苦しみが始まりました。それでも、そのさ中にも主なる神は、救いの約束と共に、皮の衣を作って着せてくださったのでしたね。

(2) 愛が覆うとは、

今朝の聖書の箇所、箴言10章12節には、「憎しみはいかさいを引き起こす。愛はすべての罪を覆う。」と記されています。

憎しみは単数形で、いさかいは複数形。愛は単数形で、罪は複数形となっています。それぞれをつなぐ動詞は、両方とも強意形で、それは意味を強めたり、繰り返すことを表わしていますので、ひとつの憎しみがふたつ以上の争いを奮立たせ、その反対に、愛がすべての罪を覆い尽くす。と理解できます。憎しみは、汲めども尽きず争いを引き起こす恐ろしさを示す一方で、すべての罪の上に愛が覆われることで救われる恵みが示されていることとなります。

それは、いかなることを指すのでしょうか？

人々は、罪の中から主の名を呼び始めました。それは、御心と違った道を選び取ってしまった時、どうしてダメなのですか？と訊ねることです。主から問いかけられた二者択一を選び取ることです。神さまの最大の関心事、わたしたちがどこにいるのかを心に留めることですね。そして人が背負いきれない重荷を、主が代わって背負ってくださいました！主が恵みをもって人々と契約を交わされ、その契約を思い起こされるとというのは、主がお造りになったすべてのものを引き受けられたことを意味していますね。神さまが大洪水を思い立った背景に人の悪がはびこり、．．．とあり、滅びと同時に救いが用意され、ノアと選ばれたものが箱舟に導かれ、その子々孫々と契約を結ばれた経緯から窺い知る主のみ思いは、御子の十字架を通してわたしたち罪人を引き受けた！ではないですか。御子の十字架を通してわたしたち罪人を引き受けてくださった主の名を呼び始めたということは、主に訊ねたり、選び取ったり、心に留めたり、わけても主が背負ってくださった恵みを噛みしめることなんですね。

ハガルが主人のサラを見下すようになった悩みをサラがアブラハムに打ち明けた時のことだが、「主がわたしとあなたの間をおさばきになりますように。」でした。愚かな人間の吐き捨てるような裁きのリクエストは、神からの祝福となって帰ってくるのですね。そして、全能の神と全き者の間に契約が結ばれます。そこに全能者が働かれるのです。神さまがヤコブに「必ずやこの地に連れ戻す」と言われたわけですがけれども、その背景に兄エサウと弟ヤコブの確執がありました。しかし、そんなふたりの間に主は「いつの日か、あなたは束縛から脱して自分の首からそのくびきを解き放つだろう。」と束縛から解き放たれる日を用意しておられたのです。キリストはわたしたちがひとつであることを祈られて、十字架で打ち砕かれたものが、隔ての壁でした。キリストがわたしたちの平和であられるのは、隔ての壁である敵意を打ち壊されたからです。わたしが神に代わることができるでしょうか。と兄弟との間で、徹底してキリストを証したのがヨセフでした。確執ある人と人の間に全能者が働かれて、隔ての壁である敵意を打ち壊されキリストの平和がもたらされるのです。すべての罪の上に愛が覆われることで救われる恵みが明らかとされるのですね。

2

結びに

今朝のメッセージの結びに、皆さんと確認したいことがあります。それは、聖書が「愛」と表していることばを、杓子定規的に理解しないということです。アガペーと言えは神の愛、とか、フィリアと言えは友情の愛とかという表面的な理解では聖書の真実を見失うことになります。事実、アガペーの愛は人が人に対し、神に対し、神が人に対し、キリストが人に対して聖書で表現されています。フィリアの愛が、父なる神と子なる神の間で表現されたりもしています。今朝の箴言10章12節も然りで、しかも、言ってみれば広辞苑にあたるヘブル語のレキシコンという辞書にも、この箇所は、人が人に対する「愛」と分類されてもいるんですね。果たしてそう言い切れるのでしょうか？

すべての罪の上に愛が覆われる。ここで言われている「愛」と同じことばが出てくる聖書のなじみ深い箇所に、ホセア書11章4節の「わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き 彼らの顎から轆を取り去り 身をかかめて食べさせた。」とあり、また、エレミヤ書31章3節に「遠くから、主はわたしに現れた。わたしはとこしえの愛をもってあなたを愛し 変わることなく慈しみを注ぐ。」とあり、また、イザヤ書63書9節に「彼らの苦難を常にご自分の苦難とし 御前に仕える御使いによって彼らを救い 愛と憐れみをもって彼らを贖い 昔から常に 彼らを負い、彼らを担ってくださった。」とあります。そうなんです。この「愛」を知らされたお互いは、この「愛」に動かされるお互いの内に主が、今も働かれる、働いていてくださるのですね。